

第四十節の秘められた歴史——第二十六番目の数

エゼキエル 番号七

Jeff Pippenger

2026-08-12

私が「ヨシヤの車輪」として特定している預言的系譜は、古代イスラエルが紀元前1097年に神を自分たちの王として退けた反逆に始まる。最初の三人の王（サウル、ダビデ、ソロモン）は、紀元前1097年から紀元前977年まで、それぞれ四十年間統治したものとして示されている。ソロモンの死に際し、ヤロブアムと北の十部族の反逆が最初の三人の王の系譜を終わらせ、北王国と南王国の双方における王たちの系譜を開始する。

最初の三人の王は多くの真理の象徴であるが、彼らが結び付けられている真理の輪の一つは、ユダの最後の三人の王、すなわちエホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤであり、彼らは次にキュロス、ダリウス、アルタクセルクセスを表している。さらに、キュロス、ダリウス、アルタクセルクセスは、それぞれ紀元前516年から紀元前457年に及ぶ彼らの三つの布告を表しており、それらはまた、それぞれ1798年、1844年4月19日、1844年10月22日に到来する黙示録十四章の三天使を表している。黙示録十四章の三天使の到来の歴史は、十四万四千人の封印の時に於いて寸分違わず繰り返されるのであり、それによって、サウルが王として油注がれることから始まる預言の線が、まもなく到来する日曜法において勝利する教会が油注がれる時にその結論へと至ることが明らかにされる。この線には、ヨシヤ王の輪が含まれており、それは紀元前977年におけるベテルとダンでのヤロブアムの反逆にまでさかのぼる。

二十二

ヤロブアムは二十二という数の象徴性を有している。彼が二十二年間統治したからであり、それによって彼の証しは、二十二によって表される歴史と結び付けられている。二十二は、ダニエルのマラーの幻において第二十二日目に示されたように、神性と人間性との結合の象徴であり、また二百二十という数—その十分の一が二十二である—とも結び付いている。

ヤロブアムが治めた日数は二十二年であった。彼はその先祖たちとともに眠り、その子ナダブが代わって王となった。列王記上 14:20

神性と人性との結合を表す「at-One-Ment（贖い）」は、10月22日、すなわち第十の月（グレゴリオ暦）に始まったキリストの御業である。十に二十二を掛けると二百二十となる。ヤロブアムはベテルとダンの両方に偽の祭壇を設けたのであり、それゆえ彼は、教会（ベテル—教会を意味する）と国家（ダン—裁きを意味する）との結合に関連する、日曜日の偽りの礼拝の象徴である。

それからヤロブアムはエフライムの山地にシェケムを建ててそこに住み、そこから出て行ってペヌエルを建てた。ヤロブアムは心のうちで言った。「今や王国はダビデの家に帰るであろう。もしこの民がエルサレムにある主の宮で犠牲をささげるために上る

なら、この民の心は再び彼らの主、すなわちユダの王レハブアムに向き、彼らは私を殺して、再びユダの王レハブアムのもとへ帰るであろう。」そこで王は相談し、金の子牛二つを造って彼らに言った。「あなたがたがエルサレムに上るのは、もはや多すぎる。イスラエルよ、見よ、これがあなたをエジプトの地から導き上ったあなたの神々である。」そして一つをベテルに据え、もう一つをダンに置いた。このことは罪となった。民がその一つの前で礼拝するために、ダンにまで行ったからである。彼はまた高き所の家を造り、レビの子らではない民のうち最も卑しい者たちから祭司を任命した。ヤロブアムは第八の月の十五日に、ユダにある祭りに似た祭りを定め、祭壇の上にささげた。彼はベテルでもそのようにし、自分の造った子牛に犠牲をささげ、自分の造った高き所の祭司たちをベテルに配置した。こうして彼は、自分がベテルに造った祭壇の上に、第八の月の十五日、すなわち自分の心で考え出した月にささげ、イスラエルの子らのために祭りを定め、祭壇の上にささげて、香をたいた。列王記第一 12:25-33.

北方十部族の基礎的歴史においては、イスラエルが王としての神を退けたこと、またアロンの反逆と金の子牛によって予型的に示されていた反逆が存在した。アロンの反逆は古代イスラエルの基礎的歴史におけるものであり、ヤロブアムの反逆は北方十部族の基礎的歴史におけるものであった。「線の上に線を」アロンは大祭司として教会を表し、ヤロブアムは王として国家を表す。これら二つの基礎的反逆は、民が人間の王を求めたイスラエルの基礎的反逆を含む一つの線である。

490

エゼキエル書に表されている聖なる歴史には、四百九十年の期間が三つあり、その一つは王たちと結び付けられ、もう一つは聖所と、さらにもう一つは軍勢と結び付けられていた。これら三つの期間は、アロンの反逆（聖所）、サウルの反逆（軍勢）、そしてヤロブアムの反逆（王）と対応している。預言者・祭司・王という三つの象徴のうち、預言していた者として特定されているのは王サウルであり、アロンは祭司であり、ヤロブアムは王であった。

さて、以前から彼を知っていたすべての者が、見よ、彼が預言者たちの中で預言しているのを見たとき、民は互いに言い合った。「キシュの子に起こったこのことは何なのか。サウルもまた預言者たちの中にいるのか。」すると、その場所のひとりが答えて言った。「しかし、彼らの父はだれなのか。」こうして、「サウルもまた預言者たちの中にいるのか」ということわざが生まれた。サムエル記第一 10:11, 12.

勝利の教会は、三十歳の預言者、三十歳の祭司、そして三十歳の王から成っており、すなわち第三十年に始まったエゼキエル、三十歳でその務めを始めたヨセフ、そして三十歳で王となり統治を始めたダビデ王によって表されている。勝利の教会は、エゼキエル書の最後の八章において地を満たす神殿として表されており、また勝利の教会はフィラデルフィアであって、それは七つの教会のうちにある第八の教会である。

紀元前977年に始まったヨシヤの預言的系統は、まもなく到来する日曜法をもって終わる。2023年12月31日に始まった十四万四千人の清めと印する働きは、ミカエルが下って『黙示録』第十一章の二人の証人を復活させたときに始まった。2023年は2001年9月11日の二

十二年後に到来したが、それはちょうど、1798年の外国人・治安諸法が1776年の独立宣言の二十二年後に到来するのと同様である。ヤロブアムの二十二年の治世は、ヨシヤの預言が提示された紀元前977年に始まった。その時、『列王記上』第十三章の不従順な預言者は、モーセがアロンの背教に立ち向かい、サムエルが王を欲した群衆に立ち向かったのと同じように、ヤロブアムの背教に立ち向かった。不従順な預言者、モーセ、サムエルのメッセージによって表される、土台的な背教に対するそれらの対決は、日曜法における第三天使の大いなる叫びを表している。それは旗印によって宣べ伝えられる警告のメッセージであり、ヤロブアムの歴史においては、「しるし」を伴うヨシヤの予告として表されている。

見よ、一人の神の人が、主のことばによってユダからベテルに来た。エロブアムは香をたくために祭壇のそばに立っていた。するとその人は、主のことばにより祭壇に向かって叫んで言った。「祭壇よ、祭壇よ、主はこう言われる。見よ、一人の男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ。彼は、おまえの上で香をたく高き所の祭司たちを、おまえの上でささげ、人の骨をおまえの上で焼くであろう。」また、その日、しるしを示して言った。「これが主の語られたしるしである。見よ、祭壇は裂け、その上の灰はこぼれ出るであろう。」エロブアム王は、神の人がベテルの祭壇に向かって叫んだことばを聞くと、祭壇のそばから手を伸ばして、「あれを捕らえよ」と言った。すると彼がその人に向かって伸ばした手はなえ、引っ込めることができなくなった。

祭壇もまた裂け、神の人が主の言葉によって示したしるしのとおり、灰が祭壇からこぼれ出た。すると王は神の人に答えて言った。「今、あなたの神、主の御顔をなだめ、私のために祈ってください。そうすれば、私の手は再び元どおりになるでしょう。」そこで神の人が主に願い求めると、王の手は再び元どおりに回復し、以前ようになった。王は神の人に言った。「私といっしょに家に来て、身を休めなさい。そうすれば、あなたに褒美を差し上げよう。」しかし神の人は王に言った。「たといあなたがあなたの家の半分を私に下さっても、私はあなたとともに入りません。またこの場所では、パンも食わず、水も飲みません。というのは、主の言葉によって私にこう命じられているからです。『パンを食べてはならない。水を飲んでではない。また、来た道を引き返してはならない。』」こうして彼は別の道を行き、ベテルに来た道を通って帰らなかった。列王記上 13:1-10。

預言者が、エロブアムから「あなたの家の半ば」を与えとの申し出を受けながらも、その食事を拒んだことは、ヘロデがサロメに自分の王国の半分を与えると約束したと符合している。

さて、折よくその日が来た。ヘロデが自分の誕生日に、重臣たち、千人隊長たち、ならびにガリラヤの主だった人々のために宴を設けたのである。すると、そのヘロデヤの娘が入って来て舞を舞い、ヘロデと彼と共に席に着いていた者たちを喜ばせたので、王はその娘に言った、「欲しいものを何でも願いなさい。わたしがそれをおまえに与えよう。」そして彼女に誓って言った、「おまえがわたしに求めるものは何でも与えよう。わたしの国の半分でも。」そこで彼女は出て行って母に言った、「何を願いましょうか。」すると母は言った、「バプテスマのヨハネの首を。」マルコ 6:21-24。

ヘロデがその王国の半分を与えると誓ったのは、彼の誕生日のときであった。ヘロデはローマの象徴であり、黙示録十七章の十人の王は、ダニエル書七章におけるローマの十重の分裂と、二章の十本の足の指によって予表されている。彼の誕生日は、日曜法において第六の王国が第七の王国に置き換えられる時にしるしづけられており、この意味において、それは聖書預言における第七の王国としての国際連合の誕生日である。まもなく到来する日曜法において、ヤロブアムの北の十部族によって表された十人の王は、黙示録「十七章」にあるとおり、一時の間、その王国を獣に与えることに同意する。

神は、彼らの心の中に御心を行わせ、また一致させ、神の言葉が成就する時に至るまで、その国を獣に渡させる思いをお入れになったからである。黙示録 17:17

エゼキエル書第四章の預言を取り上げる前に、エゼキエルが直接日付を明示している「十三」の箇所を確認することにする。それら十三の道標は、大別すると世と神の民との間に振り分けられている。エジプトに代表される世には六度、直接の年月日が置かれており、ツロには一度語りかけられ、残る六度はエルサレムが主題となっている。この書は紀元前592年、すなわち第十七ヨベル周期の第三十年に始まり、エゼキエル書第四十章一節は、紀元前573年10月22日をその周期の終わりとして示している。ヨベル周期は、9/11から間もなく到来する日曜休業令に至るまでの十四万四千人の印する時を表しており、それはさらに、2023年12月31日から間もなく到来する日曜休業令に至る、その同じ歴史のフラクタルによって表象されている。これら二つの期間はいずれも、1840年8月11日から1844年10月22日に至る期間によって予表されていた。

1840年8月11日、黙示録第十章の力ある御使いとして降って来られ、神の民が取って食べるべき小さな巻物を携えられたのは、ほかならぬイエス・キリストであった。同じ御使いが、封印の時の始まりを示すために、再び9/11に降臨された。同じ御使いはまた、2023年12月31日に、大いなる都ソドムとエジプトの大路の上で殺された二人の証人、すなわち主もまたそこで十字架につけられたその証人たちを復活させるために降臨された。その降臨は、封印の時の終結期を画するものであった。2023年12月31日から日曜法に至るフラクタルの期間の内に、祭司エゼキエルは天の神殿の幻を与えられる。その時、彼は口を閉ざされた者とされ、神が彼に語るよう命じられる時にのみ語るのである。彼のその状態は、エルサレムの滅亡によって表象される、間もなく到来する日曜法に至るまで続く。

ヨハネの場合と同様に、エゼキエルもまた、黙示録十章において降って来た御使いの手にあった巻物を取るよう命じられ、さらに、嘆きと悲しみと災いの書を食べるよう告げられた。

しかし、人の子よ、わたしがあなたに語ることを聞け。あの反逆の家のように反逆してはならない。あなたの口を開いて、わたしがあなたに与えるものを食べよ。わたしが見ると、見よ、一つの手がわたしに差し伸べられており、見よ、その中に一つの巻物があった。彼はそれをわたしの前に広げた。それは表にも裏にも文字が記されていた。そこには、嘆きと悲しみと災いが記されていた。エゼキエル 2:8-10。

このメッセージは三重のメッセージとして表されており、それによって黙示録第十四章の三天使のメッセージを象徴的に示している。したがって、それはエゼキエル書第九章および黙示録第七章に示されているように、教会と地の罪を嘆き悲しんでいるエルサレム

の内にいる者たちに印を押す、第三天使の封印のメッセージである。

すると、イスラエルの神の栄光は、その上にとどまっていたケルブから上って、家の敷居に移った。そして主は、亜麻布をまとい、脇に書記の墨つぼを帯びたその人を呼ばれた。主は彼に言われた、「町の中を、すなわちエルサレムの中を巡り、その中で行われているすべての忌むべきことのために嘆き、悲しみ叫ぶ者たちの額にしるしを付けよ。」エゼキエル 9:3, 4.

その刻印を受ける者たちは、教会の罪と国の罪のゆえに嘆いており、エゼキエルの証しは、教会と世を象徴するエルサレムとエジプトの歴史の上に織り込まれている。

「敬虔のパン種は、その力をことごとく失ったわけではない。教会の危険と沈滞とが最も大きい時に、光の中に立っている小さな群れは、この地において行われている忌むべき事々のために嘆き、また叫ぶであろう。しかし、とりわけ彼らの祈りは教会のために立ち上るであろう。なぜなら、その会員たちが世の流儀に従って行動しているからである。…」

「命令はこうである。『都の中、すなわちエルサレムの中を巡り、そのただ中で行われているすべての忌むべきことのために嘆き、叫ぶ者たちの額にしるしを付けよ。』これらの嘆き、叫ぶ者たちは、いのちの言葉を掲げていたのである。彼らは譴責し、勧告し、懇願していた。神を辱めていた者たちのうちには、悔い改めて御前に心をへりくだらせた者もいた。しかし、主の栄光はイスラエルを去っていた。多くの者がなお宗教の形式を保ち続けてはいたが、主の力と臨在は欠けていた。」『証集』第5巻、209、210頁。

『哀歌』の文脈において、黙示録十四章の三天使を予表するものとしての悲嘆と災いにあって、哀歌と悲嘆は第一および第二の天使であり、第三は災いの使命であって、黙示録七章の四人の抑止する天使たちによって抑えられている東風の象徴である。

エジプト

エゼキエル書には、十三の年代の記載がある。エジプトに関する一連の年代の最初のものはエゼキエル29:1であり、それは紀元前587年を示していた。

第十年の第十の月の十二日に、主の言葉が私に臨んで言われた。人の子よ、あなたの顔をエジプトの王ファラオに向け、彼と全エジプトに対して預言せよ。語って言え。主なる神はこう言われる。見よ、わたしはあなたに敵する。エジプトの王ファラオよ、あなたは自分の川々のただ中に横たわる大いなる竜であり、『わたしの川はわたしのものだ。わたしが自分のためにこれを造ったのだ』と言う者である。エゼキエル 29:1-3

紀元前587年は包囲の年であり、それはエルサレム滅亡の一年半前に始まった。その時エゼキエルは、神がエジプトを打ち倒されること、そしてその打倒が、エジプトの竜を頼みとしていたことの愚かさを神の民に示すことになる」と宣言する。章の終わりには、エジプトがバビロンに与えられるとの宣告がなされ、こうして、十人の王たちが聖書預言の第七の王国を現代のバビロン、すなわち七つのうちに属する第八の王国に与える時が特定されている。その預言は、章の終わりに示されているとおり、十七年後の紀元前571年に成就した。したがって、第29章には、エジプトに関連する年代記載への最初と最後の言

及が含まれている。

第二十七年、第一の月、その月の一日に、主の言葉が私に臨み、こう言われた。人の子よ、バビロンの王ネブカドレザルは、その軍勢にツロに対して大いなる労役をさせた。すべての頭は禿げ、すべての肩は擦りむけた。それでも、彼もその軍勢も、ツロに対して果たしたその奉仕のゆえに、何の報酬も得なかった。それゆえ、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはエジプトの地をバビロンの王ネブカドレザルに与える。彼はその富を取り去り、その略奪物を取り、その獲物を取る。それが彼の軍勢への報酬となる。彼がそれに対して仕えたその労苦のゆえに、わたしは彼にエジプトの地を与えた。彼らはわたしのために働いたからである、と主なる神は言われる。その日、わたしはイスラエルの家の角を芽生えさせ、またあなたには彼らのただ中で口を開くことを許す。こうして彼らは、わたしが主であることを知るようになる。エゼキエル29:17-21。

十七節の「第二十年の第一の月の第一日」は、エゼキエル書における十三の日時の最後の日付を表しており、紀元前573年10月22日の後に当たる唯一の日付である。これは、ダニエル書十一章四十二節および四十三節における北の王にエジプトが与えられる時を表すとともに、十人の王たちが、自らの第七の王国を、七つのうちに属する第八の王国に渡す時点をも表している。それは、「イスラエルの家の角」が芽を出す時に成就する。イザヤ書において、イスラエルは東風の日に芽を出す。

ヤコブから出る者たちは根を下ろし、イスラエルは花を咲かせ、芽を出し、その実をもって世界の面を満たす。イザヤ 27:8。

エゼキエル29:17が成就し、エジプトの竜が、まもなく到来する日曜法において教皇制の獣に引き渡されるとき、後の雨はイスラエルの上に量りなく注がれる。その雨は、キリストが復活の後に御父のみもとへ昇られ、その後地上に下って弟子たちに息を吹きかけられたことに予表されるように、9/11に散水として始まった。

「キリストが弟子たちに聖霊を吹きかけ、彼らにご自身の平安を与えられた行為は、ペンテコステの日に与えられる豊かな大雨に先立つ、ほんの数滴のようなものであった。」『預言の霊』第3巻、243頁。

エゼキエルによるエジプト陥落の預言は、包囲の年である紀元前587年に宣言され、「十七」年後にその預言は成就した。それは「十七」という数によって表される期間において成就しており、それゆえダニエル11章40節の秘められた歴史を表象している。それは、エゼキエル9章に描かれている十四万四千人の証印の時に成就すべきものである。証印の時に後の雨が注がれ、それは最初に9/11における散布として、次いで日曜法における完全な注ぎとして与えられる。イザヤによれば、それは「東風の日」に成就し、イスラムは東風であり、またイスラムは第三の「禍い」である。エゼキエルが食べるべきであったメッセージは三重のメッセージであり、その第三の部分が禍いのメッセージであった。

エゼキエルの十三の年代記された託宣は、エルサレム、エジプト、およびティルスに関連して提示された。それらはすべて、「十三」という数によって表象される反逆を扱っていた。

次の記事では、エゼキエルの年代決定について引き続き考察する。